

JELA NEWS

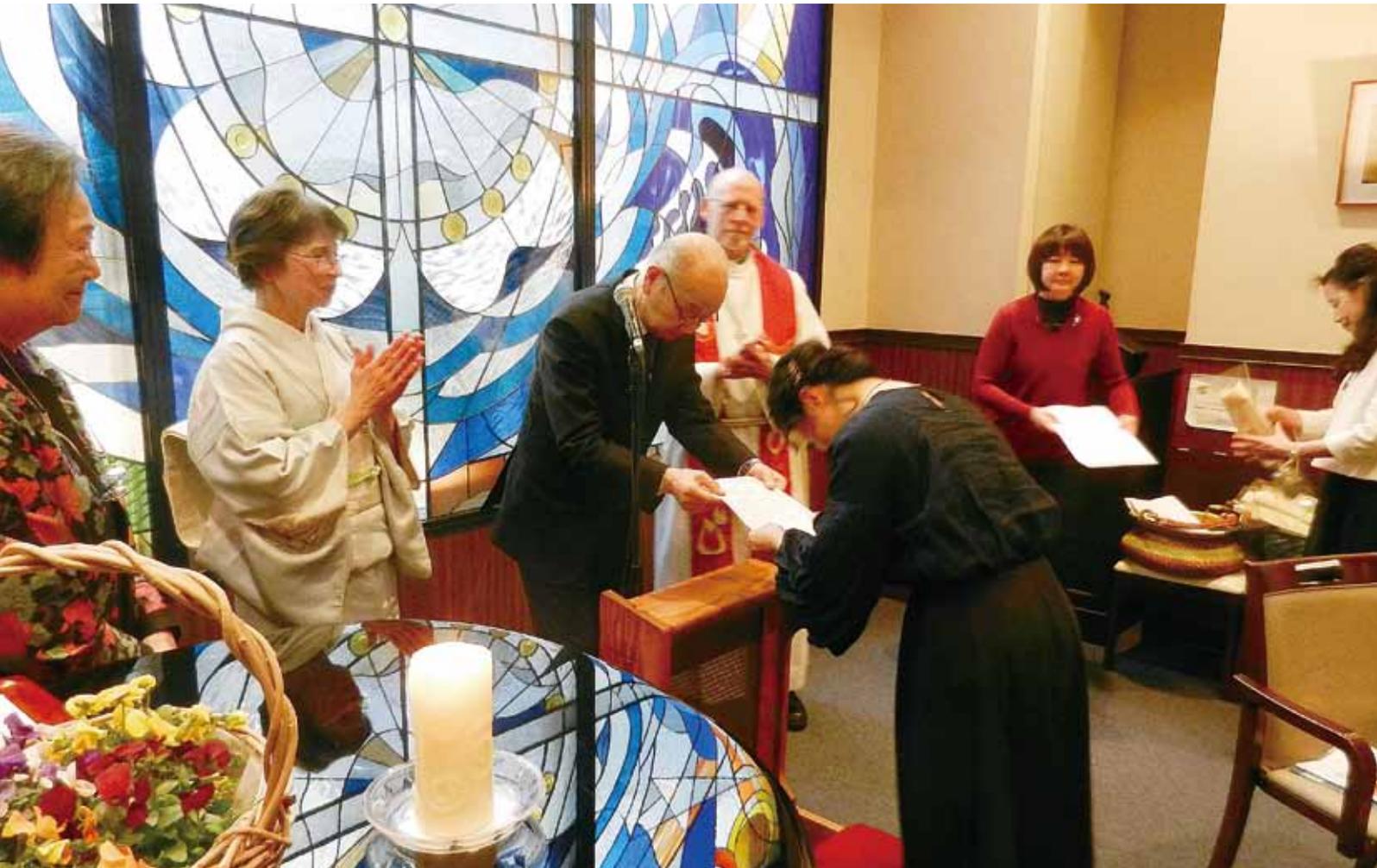
ジェラニュース 第45号 2018年4月15日発行 発行責任者 森川 博己

一般社団法人日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp

難民支援／世界の子ども支援／ボランティア派遣／リラ・プレカリア(祈りのたて琴)／奨学金制度／宣教師支援

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。 マタイによる福音書25章35～36、40節



リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座が有終の美

リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座が3月1日の第6期生の修了証書授与式をもって12年間の歴史に幕を閉じました。講座修了者総数は38名。多くの方たちが病院・ホスピス・施設などでパストラル・ハーブの奉仕にたずさわっておられます。講師陣と修了生の寄稿文や記念イベントの紹介を2～8ページに特集しました。

【この号にはこんな記事が】

リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座 寄稿文集 …… 2～7 リラ・プレカリア12周年記念イベントのお知らせ
／読者からの便り …… 8 世界の子ども支援チャリティコンサート2018のお知らせ …… 9 ジェラハウス建て替えのお知らせ／難民支援「難民認定審査が甘いとうなる？」(山本哲史) …… 10～11 2018年度米国キャンプ参加者募集／JELA職員募集／川柳ひろばだより／支援者一覧／編集余話他 …… 12

リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座 終了 12年間の感謝を込めて

JELAが主催してまいりましたリラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座が、3月1日の第6期生修了式をもって12年間の歴史に幕を閉じました。

リラ・プレカリアはキャロル・サック宣教師をプログラム・ディレクターに迎え、音楽死生学とキリスト教の理念を融合させる形で、2005年に開講いたしました。12年間で38名の修了生を輩出し、日本社会にパストラル・ハーブ(生きたハーブと歌による祈り)を届けてまいりました。現在、約20の国内外の施設で修了生が奉仕活動を行っています。

リラ・プレカリアのような先進的な働きを日本で広めるために、奉仕者を養成する講座を12年間に渡って継続できたことを、JELAは誇りに思っています。しかしそれが実現するにあたっては、キャロル宣教師をはじめ、諸先生方のご指導と受講生・修了生の皆様のご協力はもちろんですが、何より神様の憐みと恵みによるところが大きく、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

リラ・プレカリア12周年を記念する本号には、キャロル宣教師はじめ修了生など関係者の方々から原稿をお寄せいただきました。それを読むことで、リラ・プレカリアの活動がどのように広がり、育っていったかをご理解いただけるのではないかと思います。

これまでリラ・プレカリアの教育・奉仕活動にご理解とご協力を賜りました関係者の皆様に、深く御礼を申し上げます。2年間の講座は終了しましたが、今後もキャロル宣教師と講座修了生を中心にリラ・プレカリアの多様な活動が行われる予定です。それに関連した5月の催しについても、この特集でご紹介しています。

皆様、これからもリラ・プレカリアをご支援くださり、パストラル・ハーブの働きが用いられますように、共に祈りにおぼえていただけると幸いに存じます。(JELA事務局) ※各原稿のオリジナルはJELAニュースブログに掲載しています。

想像をはるかに超えて起こった事柄

キャロル・サック プログラム・ディレクター (原文英語/和訳 JELA事務局)

アメリカで2年間の音楽死生学の学びを終えようとしていたころ、「日本で、どのようにこの働きを広めていくのですか?」と聞かれました。実は、私もそのことをずっと考えていました。リラ・プレカリアでは「パストラル・ハーブ」と呼んでいるこの働きは、今までにない奉仕の形であり、まったく新しい方法で音楽を用いるものです。自分の他には、この分野で訓練を受けた者が日本にはいないことも知っていました。

けれども質問を受けたとき、心の奥のどこかから、すぐに答えが湧いてきました。「はっきりとは言えません。でも、道が開ける気がするんです。というのは、この働きが大切なもので、真実なものだからです」。この働きは、一人ひとりを大切にします。その人がどんな人だとか、何を信じているかとか、どんな生活を送ってきたかとか、男であるか女であるかとか、社会的に重要な立場にあるかないかとか、そんなことは

関係ありません。みんなが人間であり、神様の愛する子どもなのです。だから、これは真実の働きなのです。

ある医師から同じ質問を受けた時も、同じ答えをしました。すると彼はこう言いました。「道は必ずと開けますよ」。貴重な助言でした。心の中で「そのとおりで」と思える言葉でした。パストラル・ハーブの働きを異文化に取り入れようと、もがくのではなく、それが受け入れられるように、自然体で見守るべきだ、と彼は私に教えてくれたのです。

2002年に日本に戻ってきた時、私の心は平安でした。「神様がふさわしい扉を開き、奉仕に遣わして下さるでしょう」との思いがありました。どんな扉が開かれるかはまったく分からなかったのですが、しかし、驚くべき展開がありました。私は、どこかの施設で、できればホームレスの方々や助けのない方々のために、静かにパストラル・ハーブの奉仕をしたいと思っていました。そして、ホームレスの方のためのホスピス「きぼうのいえ」のスタッフの皆さんは、私のパストラル・ハーブが「きぼうのいえ」の患者さんにふさわしいものだ、と歓迎してくださいました。私はまた、家族や友人のた

めに弾いてほしいと知人から頼まれました。これらの機会をとおして、日本での奉仕について神様が私の祈りに応えてくださったと感謝をおぼえました。

ところが、神様のご計画はそれ以上のものでした。なんと当時のJELA事務局長ローウェル・グリテベックさんが私に、パストラル・ハーブを日本人に教えてみないかと聞いてきたのです。光栄なことでしたが、そんなことは自分には到底できないと思いました。しかし、祈りの中で、人間にはできなくても神様にはできる、ということに気づかされました。この働きが神様から求められているものなら、一緒に教えてくれる人、必要なお金、複数のハーブ、教える場所、講座内容や生徒たち、そして協力してくれる組織など、すべてを神様が備えてくださると感じたのです。JELAが全面的にサポートしてくれることも大きな恵みでした。私はこういった思いを胸に、「やってみます」と答えました。

それから12年。今は神様への畏怖の念でいっぱいです。必要なものをすべて与えてくださいました。JELAホールというきれいで、教えるのに最適な場所(複数のハーブも!)、すばらしい教師たち(特に音楽担当の教師に感謝)、献身的にサポートしてくれたJELAのスタッフ、パストラル/霊的ケアに深く根ざしたカリキュラム、優れた外部講師、ルーテル学院大学の協力、そして日本とオーストラリアでボランティア奉仕をしている38人の献身的な修了生。このような未来を神様が最初から思い描いていらっしやっただけは、夢にも思いませんでした。

神様はさらに、想像もしなかった場所で、キリストの赦し・恵み・希望を証しする機会も与えてくださいました。2011年3月11日の東日本大震災後に、私たちは祈りの音楽を東北の公立学校や仮設住宅に届けました。キリストのメッセージと歌を多くの大学や刑務所、医療関係者や企業で働く人々、音楽関係の団体、そしてもちろん教会にも届けてきました。

私の目標は、これからも静かな働きによって、日本社会の思いやりのレベルを高めることです。壮大な計画や運動によってではなく、一人ひとりの人への働きかけに

よって、それを達成することです。神様ご自身も私たち一人ひとりに、静かに働きかけてくださるのですから。

リラ・プレカリアの奉仕者養成講座は幕を閉じますが、この働きはこれからも続きます! この12年間、共に教え、学び、働いた一人ひとりの方たちに対して、感謝の気持ちでいっぱいです(私を支えてくれた夫にも感謝します!)。リラ・プレカリアは、偉大なチームワークの賜物です。決して一人ではあることではありません。他者への奉仕のために自分を捧げてこられた多くのすばらしい人々との出会いを通して、私の人生は計り知れないほど豊かになりました。なんと私は恵まれているのでしょうか!

最後に、これまで関わってきた患者さんたちに感謝の祈りを捧げます。患者さんたちは、この働き、そして人生、死、信仰において、唯一まことの教師だと言えます。究極の真実、不朽の価値、そして人間一人ひとりの命の貴さを教えてくれるのは、患者さんたちだからです。

人生で「何が真実か」を追い求める時、「それが向こうからやって来る」ことを忘れてください。私たちが主の愛の真実を他者と分かち合おうとすると、神様は必ず道を開いてくださいます。それは、私たちの想像をはるかに超えて起こる事柄なのです。

リラ・プレカリアの12年間に想うこと

ヴォイス講師 中山 康子

○開講当初のこと

1期生が決まって、いよいよ開講に先だつ3月、教師3人で合宿をしました。八ヶ岳・富士見のベネディクト修道院では、研修講座で必須になる音楽の課題11曲(2期以後は12曲)の選択をしながら、詩編をたくさん歌うミサに参加し、男性修道士が焼く出来たてのパンを味わったのは懐かしい思い出です。

ハーブの神藤雅子先生は、著名なハーピストとして凜としていらして、レッスンは基礎に厳しいものでした。うって変わって、休憩の時の笑いの絶えないり



ラックスした雅子先生は、リラ・プレカリアの発足時に神様が派遣して下さった特別な人材でした。雅子先生は2期まで教えてくださいました。

○キリスト教を基本としつつも押しつけず

3期以後は3人の教師全員がクリスチャンでしたので、受講生の中にノンクリスチャンがいてくださることは、とてもありがたいことでした。と申しますのは、研修講座修了後に用いられるのはほとんどがノンクリスチャンへのご奉仕だからです。講義の内容は、詩編を中心にしていますから、当然キリスト教を基本にした内容にはなるのですが、その押しつけにならないように留意することを念頭に置きました。公開講座にお出でくださった講師には、キリスト教界以外に仏教・神道にも通じる、独善的にならない一般的な内容を盛り込んで教えていただきました。家の宗教は仏教だったり神道だったりする受講生とは、お互いの信じることを尊重しながら授業を進めることが出来ました。

○さまざまな受講生と奉仕先

第3期から2年間のプログラムになりましたが、それぞれの研修講座の期間には、いろいろなことがありました。親しい方を看護したり看取ったり、家族の急死の連絡を受けたり、本人の手術が必要になったり、お子さんの結婚がまったり、お孫さんの誕生があって子育ての応援にかり出されたり、2年間という期間に人生の大きな節目を経験する受講生が、教師にとっての「先生」でした。

リラ・プレカリアを学んで社会への奉仕を目指したものの、むしろ牧師となる道を選んで途中で止めるなど、ごく数名の受講生以外90%以上が、思わぬ経験を

しながらも修了を遂げました。その中でも東日本大震災に見舞われ、当初は遠距離バスも新幹線も不通になり、津波が汚泥を運び込んだ自宅の庭先に知らない人が流されて亡くなっているという受講生には、東京から教師たちが援助物資を運び、顔と顔を合わせて無事を確認しました。また自宅のテレビが地震で窓外に落下するほどの揺れを経験して、オーストラリアに「奇跡」の脱出をした人もいました。その後の修了生の奉仕先は、当初の看取りのみならず、悩み苦しむ人や災害に遭われた人のこころのケアにも向けられるようになりました。

北海道、山形、秋田、福島、奈良、兵庫から、遠距離を毎週通った方、このプログラムのために退職金をあてて学んだ方々。一人ひとりのことを心に留めています。修了生の久しぶりの再会では、日本的ではありませんが、ハグするほど親しくなり、心が繋がっている思いがして忘れられません。今や、修了生は北海道から沖縄に広がり、オーストラリアにも進出し、東北では秋田・山形・仙台・福島、関東では千葉・神奈川・埼玉・東京、関西では神戸・大阪・奈良、などで奉仕の場を得て用いられています。

○時代の波に助けられて

シシリー・ソンドース医師がイギリスでホスピス病棟を始めたのが 1967 年とのことですが、リラ・プレカリアの研修講座を考え始めた 2005 年頃は、日本ではボランティアとしてホスピスにかかわること、あるいは看取りにかかわることは、なんとなくタブー視されていることに踏み込むような感触がありました。

ところが映画「お葬式」が 1984 年に公開された後、リラ・プレカリアの訓練を続けて

いる間に「おくりびと」(2008 年公開)、2010 年の「おとうと」公開など、看取りのことが社会的に多くの関心を集めるに至り、時代の波がリラ・プレカリアの必然性を後押しした感があります。私は第 2 期の途中から参加したオレゴン州のリチャード・グローヴ氏の「尊厳ある生と死」(Sacred Art of Living and Dying)のコースに通いながら、死のことをこれだけオープンにするには、日本では少なくとも 30 年は早いのではないかと感じたことを覆される思いでした

○最後に感謝

音楽死生学を学んで帰国したキャロル宣教師を、JELA の当時の事務局長のローウェル・グリテベック氏、事務長だった古川文江氏が後押しして開講した研修講座ですが、その後を継承された森川事務局長、中島愛氏(前職員)、奈良部慎平職員、他 JELA のスタッフと、そして何よりもそのすべてを導き、支え、守ってくださった神様に感謝あるのみです。

神の国と神の義をまず求めなさい、すべてのものは与えられる、ハレルヤ。

わたしに必要だった 8 年間

ハーブ講師 火ノ川 京子

リラプレカリアは 2 年間の学びです。私は 3 期生から 6 期生まで、8 年間共に学ばせていただきました。自分がキャロル先生に習いたい、1 期生になりたい、という願いは叶いませんでしたが、その 4 年後、クリスチャンのハーブの先生を探しているということで、ハーブの講師となりました。神様は本当に不思議なお方です。受講生たちは 2 年で修了しますが、私には 8 年間が必要だったのでしょう。

ある時、キャロル先生に聞きました。どうしたら、キャロル先生のように弾けるようになりますか？ 答えは、「火ノ川先生には技術があります、でもキャロルには無いので、イエス様に頼るしかありません」。キャロル先生の信仰に脱帽です。

歌の康子先生、直美先生と、このリラプレカリアの働きに共に携わらせていただいたこと、この 8 年間は、宝です。

リラプレカリアの修了生のみなさんが良き働きで用いられますよう、お祈りしています。みなさんにエフェソの信徒への手紙 2 章 10 節を贈ります。「なぜなら、わたしたち

は神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備をしてくださった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです。」

We are God's handiwork, created in Christ Jesus to do good works. Ephesians 2:10

リラ・プレカリアに関わって思うこと

ヴォイス講師 渡辺直美

私のリラ・プレカリアとの最初の出会いは、映画館の中でした。山田洋次監督が好きで観に行った「おとうと」で、わずかな時間映し出された、ハーブを奏で歌う女性の姿(* 演じたのはキャロル・サック宣教師)。そのシーンはとても印象深く、映画が終わってからも「あれは何の音楽だったのだろう」と心の中で何度も蘇ってくるのでした。

それから少しして、その映画の中の女性と出会い、リラ・プレカリアという音楽の中に身を置くことができるようになるなんて、神様はなんと粋なはからいをされるのだろうと、偶然ではない何か不思議な糸で手繰り寄せていただいたような、そんな気持ちになりました。

リラ・プレカリアの講座で歌の講師を担当するにあたって、キャロル先生のハーブと歌を、床に横たわりながら初めて聴かせていただいた時のあの感覚は、今でも忘れられません。目を閉じているのに目の前はとても明るく輝いていて、まっすぐに空へと続く線が天国への道しるべのように感じました。体は全身マッサージを受けたかのようにほぐされ、温まり、プカプカと浮いていて、「きっと母親のお腹の中ってこんな感じなんだろうな」という思いに包まれたのでした。リラ・プレカリアがどんなに素晴らしく、社会で必要とされる音楽であるかを、この体験を通してすぐに知ることができました。

私の祖父はもう長いこと耳が悪く、会話をするときは筆談を求めるくらいでした。なので祖父と最後に会ったとき、聴こえないかもしれないけれどと思いながらも、耳元でたくさん歌いました。その時の祖父の表情は今でもはっきりと覚えています。目にいっぱい涙をためて、時に涙を流しながら一緒に口ずさんでいるかのように唇を動かしてくれていました。呼吸の一致を意識した寄り添いに触れたとき、耳の良し悪しやさまざまな症状に関係

なく、人は祈りの音、声をきちんと聞いているのだと強く実感した瞬間でした。それは門が開かれ、神様のもとへ帰る準備がなされている愛の証なのかもしれません。「私たちの国籍は天にあります」と聖書にあるように。「安心してこちらへいらっしゃい」と両手を広げ待っていてくださっているのでしょう。

リラ・プレカリアは痛みや苦しみ、深い孤独から解放され、神様へと繋がる光の道のようなものだと思っています。ただただありのままの姿を抱きしめてくれる祈りの音楽。この音楽がいつまでも、どこかで誰かのために奏でつづけられることを、しみじみと今は願うばかりです。

リラ・プレカリアの思い出

1 期生 西野 みゆき

まだ、リラ・プレカリアの講座が始まる前、キャロルさんを通して初めてハーブと歌の祈りに出会った時のことが、はっきりと思い出されます。音の響きによって沈黙へと導かれ、私の心と体が静まっていく感覚を忘れることができません。その感覚は、今、自分が奉仕をするようになって抛り所となっているように思います。

私の住んでいる千葉県鴨川市から恵比寿、三鷹まで通うことは、田舎者の私にとって大きなチャレンジでした。いつも祈りながら通いました。車酔いで辛かったのですが、それもリラの学びとともに克服できたことは思いがけない恵みでした。

たくさんの出会いを頂きました。小さな世界で生きてきた私には驚くことばかりでした。すべてが私にとって必要なことでした。リラで学んだことは私の宝物です。遣わされるさまざまな場所で出会う人たちと、その宝物を分かち合える喜びに感謝しています。

リラとのあゆみ

2 期生 出村由利子

昔から教会が好き、人の世話が好き、音楽が好きでした。看護師となり病院や教育に携わりつつ、ホスピスでマッサージのボランティアをするなど、人生半ば以降はホスピスに関係する道を歩いていました。でもいつも、自分に何か足りないものがあると感じ続けていました。あるとき、リラの講座が開かれると知り、直感でこれだ、と思いました。私に足りないもの、それはこころ・愛でした。

しかし 1 年半の学びでそう簡単に人間が変わるはずはありません。ハーブも歌も苦勞しませんでした。ただ詩編が理解できませんでした。特に嘆きの詩編を読むと苦しくなり、苛立ち、怒りがこみ上げてきました。意味を見いだせず、リラに反抗しつつ実習時期を迎えました。そして生まれて初めて、呼吸を合わせて歌うことがその場にいる人との一体感を生み出し、空気が澄み渡り、魂の交流ができるという体験をしたのでした。「神と共に在る」ことが祈るということだと知りました。

リラ卒業後、アメリカの教会や老人ホームで、またコスタリカの老人ホームで奉仕しました。言語も人種も祈りには関係ありませんでした。無心に歌いハーブを弾き、その場にいる人と呼吸が一つになったとき、たくさんの奇跡を経験しました。

失敗もありました。コスタリカで高齢者がガバッと起き上がり、ハーブに殴りかかってきたこともありました。大学の授業中に体調を崩す人や、宗教に対する嫌悪感を示した人もいました。でも出会った人すべてが先生であり恵みでした。

これからもどこに行こうとしているのか、愛とは何か、10 年経った今もわかりませんが、神と共に歩む足どりは、加齢とは逆に軽やかになっている気がします。これからもどんな先生に巡り合うのかと楽しみにしつつ。多くの恵みに感謝して。

東日本大震災の被災体験とリラ・プレカリアの学び

3 期生 横山 恭子

私がリラ・プレカリアの 3 期生として入学したのは 2010 年でした。その翌年 3 月 11 日に東日本大震災があり、10 メートルもある津波が我が家を襲ったのです。今思

うと不思議なのですが、前日の木曜日はリラの講義があり「嘆きについて」を学んでいました。そしてその講義の時に私は、クラシックギターで「ラグリマ」(涙)という曲を演奏しました。なんと、「嘆き」を自分の事として体験することになりました。

そのときは新幹線もストップしていて、学びに復帰したのは 5 月からでした。自宅近辺にかけての流通がストップしており、お店に行っても何も買うことが出来ない状態でしたが、4 月 9 日にやっと高速が我が家近くのインターまで開通になったのを見計らって、キャロル先生ご夫妻、中山先生、当時の JELA 職員・中島愛さんが、リラの卒業生・同期生の方々が用意してくださった支援物資をワゴン車に山のように積んで東京から仙台まで来てくださったことは、私も家族にとっても一生忘れることのできない思い出です。イエス様が助けに来てくださったと心から思いました。

しばらくして落ち着いてから、どうして神様は私と家族に「嘆き」を体験させたのだろうと思い巡らし、リラ・プレカリアの学びは病気の方、心に悩みを抱えている方のそばに寄り添い、痛みを共有し祈る働きであることを思いました。失って見なければわからない喪失感、虚脱感、不安を味わったことには意味があると思いました。そして何もできない自分、ありのままの自分を受け入れて他の人に助けていただくことを実体験として学びました。

リラ・プレカリアの学びと震災の経験によって神様の大きな愛と憐れみを体験することになったのです。そして何より嬉しかったのは、リラ・プレカリアの学びと震災の経験を通して夫がイエス様を信じてクリスチャンになったことです。



大いなる癒やし

4 期生 大石 千絵

リラ・プレカリア研修講座の修了式で「さあ、これから本当の先生(患者さま、利用者さま)のところへ行きなさい」と送り出されてから 4 年が経とうとしています。その言葉どおり、ベッドサイドでの奉仕において、毎回一期一会、どんなに多くの学び、多くの恵みを受けてきたでしょう。この道を与えられたことをありがたく思います。

私は現在、聖ヨハネ会・桜町病院療養病棟で奉仕をしています。回数を重ねるごとに、施設の方々と心が通い合うようになっていくのは大きな励みです。クリスマスには、中村享子療養病棟師長がメッセージをお寄せくださる機会がありました。

「いつもありがとうございます。患者さんはもちろんですが、毎日忙しく心身ともに疲れている私たちスタッフにも、心に響く癒やしのひとときです。手を休めて聴き入るゆとりはありませんが、その音色を耳にし、心休まるひとときとなっています。これからもぜひ、患者さんのために、すてきな時間を提供していただけたらと願っております」。

　　昨年は、別の病院を訪ねる機会もありました。その病院にハーブが入るのは初めてで、聴き終わってから病院長が「病院にはこういうものが必要だ」とおっしゃったのが印象に残りました。たくさんの方々の死に寄り添うなかで、疲弊し渴きがちな医療従事者の心身に、リラの祈りは潤いをもたらすと感じる経験であり、キャロルさんがよくおっしゃる「リラの祈りの(プラスの)副作用」を見たように思いました。

　　リラの祈りは、お一人の方の呼吸に集中し命の尊厳に寄り添う小さな働きですが、そこにはいつも、聖霊を豊かに満たし、周囲をも大きく包み込む神の無限の愛、癒やしの力を感じます。神に感謝。

希望と安らぎをもたらす働き

5 期生 村岡 晶子

リラ・プレカリア研修講座での深く豊かな学びの 2 年間は、人生の中の特別な恵みと至福の時間となった。リラの講座は

すべてに愛と慈しみがゆきわたり、先生方もすべてを受容する姿勢と優しさ、温かさで満ちていた。キャロル先生が心を込めてご準備される、『詩編』を中心とするリラの講義は深く豊かで、細やかに配慮された環境空間(ローソクの灯、美しいチャイムの響き等々)はいつも聖霊に満たされ、祈りと希望に満ちていた。その中で私たちは共に学び、心や魂、いのち、ゆるしと愛、慈しみ、人間について、神と人との関係、人の尊厳などについて考え、また自己と深く向き合い、真の人間理解を深めた。そして、「あなたは神さまから愛されている大切な存在です」と通奏低音のように繰り返されるメッセージは魂の深奥に浸透していき、自分と他者へ開かれた心へと丁寧に導かれた。

　　実習では、利用者さまから「いのち(存在尊厳)そのものの美しさ」に触れる深い静かな感動を得て、《人は、たとえ目に見えない言葉や行いは何も表現できなくても、心(魂)は確かに感じていて、自分の思いを表現したいと希望している》こと、《私の思いで相手を判断することなく、ありのままを受けとめ、その方の内なる魂に心の目を向ける》ことの大切さを心に刻む貴重な経験(神様からいただいた Gift)となった。

　　今、この 2 年間で得たことを心の礎にご奉仕をしている。臨終の時を寄り添うこともあり、利用者さまの、「あなたに出会えて本当に幸せでした。ありがとう」「なんて優しい……初めてです」という言葉は、そのまま " リラ " へのお言葉だろう。ご遺族も、「亡くなった場面を思い出す時、ハーブを弾かれるお姿と優しい音色が思い出されて、悲しみだけでなく優しい気持ちになれます」と感謝され、リラがご本人とそれがご家族をも癒やし、支え、希望と安らぎになっていることがわかる。

　　これからも神さまの小さな道具としてリラの道を歩み続けたい。

俺も捨てたもんじゃない

5 期生 金 銀淑

" 俺も捨てたもんじゃない "

これは、キャロル・サック先生のリラ・プレカリアのご奉仕を受けられた、ある刑務所の男性のつぶやきです。

　　それまで荒れた人生を生きてこられた男性の氷山のような心が太陽の温か

さの前で無抵抗に溶けてしまった瞬間、発した言葉でした。まさに、男性が着ていた人生の何重もの武装を脱がせたのは北風ではなく、太陽でした。言い換えれば、神様からキャロル先生を通して注がれた無償の愛でした。

<poem & photo by G.S.Kim>



愛の香り
一本の水仙の香り
天地が揺れる
Euodia
Spiritual journey
within God
begins with Lyra Precaria

私たちは神に対するキリストのかおりで

ある。(コリント人への第二の手紙 2 章 15 節)

“For we are to God the aroma of Christ” (II Corinthians 2:15)

　　真冬の寒さの中で咲いている水仙の香りは、天地を揺らすかのように深く、リラ・プレカリアのご奉仕をなさる時のキャロル先生のイメージとオーバーラップしました。

　　神様の愛と慈しみを含んだ歌声とハーブの音色は、諸々の苦しむ人々の魂に触れ、スピリチュアルな旅を経て、痛みや悲しみ、不安や怒り、喪失感などから平安に導く力を持っているようでした。 1 月の冷たい空気を甘いものに変えてしまう水仙のように、否定的だった男性の気持ちを肯定的なものに変えることができたリラ・プレカリアの本質は、愛に違いありません。12 年間のリラ・プレカリア研修プログラムの終了を迎え、修了生それぞれが小さな一本の水仙になって、聖フランチェスコのお祈りのごとく、神様の愛を運ぶ道具になりたいと願ってやみません。

すばらしい宣教との出会い

5 期生 中川 愛弓

　　講座の開講式で JELA ミッションセンター 2 階の控室にいた私たちに声がかかり、1 階へ降りていくと通路でしばらく待たされ、ホールのドアが開くと、2 台のハーブが静かに、ゆっくりと奏でられ始めた。部屋の中心に花鉢と灯されたロウソ

クが置かれ、それを囲むように置かれた椅子。そこを 7 人の新人はゆっくりと進み着席する。

　　ハーブの音色が身体に沁みこむようだった。この時、私ははっきりと感じた。私の何かが「大切にされる」という愛情を感じ、涙が込み上げてきたのだった。これまで目的をもって生きているようであっても、心の深いところにある思いは後悔や悲しさの傷、頑なさからうまれる痛み、等々でいっぱいだった。それが、あたたかさに包まれ、凝り固まっていたものが溶けだした瞬間だったのかもしれない。ハーブから伝わる波動音がいままで消化できていなかった私の《心に消えない》Dis- Orientation (逆境) に触れ、愛に包まれたのを感じたのではないだろうか。

　　リラ・プレカリアの学びは、自分自身で自分の心の奥深くを切開する厳しいものとなった。私自身の魂の痛みをなぞる必要があった。特にキャロル先生の授業は、心や感覚への刺激を体感するものであったためか、心の痛みとともに気持ちの中に留まり、私の気づきを思考に移すには気持ちが整理されないこともあったが、そういう気持ちを携えていることも恵みだと先生や仲間が気づかせてくださった。

　　授業ではいつも、キャロル先生の熱い心を込めた「神の愛」が語られた。授業の準備にも私たちへの思いやりがいっぱいに詰まったものであった。いろいろなアイデアを用いて、全身全霊で私たちへの神の愛を伝えてくださった。私たちはすばらしい宣教に出会ったのだと思っている。その語られた教えは私たちへの人生の応援であったし、キャロ



ル先生の眼差しは私たちが出会って行く人々へと向けられていた「大切な愛」だった。

　　「わたしの目には、あなたは高価で尊い、わたしはあなたを愛している」(イザヤ書 43 章 4 節前半)が心に沁みてくる。受講中は目の前のことに一生懸命で唯々、こなしていたものが、「大切なたいせつな宝物」と、心の底から思えるようになった。「リラ・プレカリアを知りなさい」と神に呼ばれ、「もしかしたら自分に必要なことなのかも……」と、それに応えたことから始まった学び。授業と宿題に不可欠なのは「常に神と対話する」ことであったが、今現在もこれからも、そのことで自分を見出し回復していくことだろう。いつもキャロル先生が用意してくれていたのは、私たちへの祝福だった。どんな場所でもあの、ロウソクの灯火を消さないようにしていきたい。

　　感謝の歌をうたって主の門に進み、讃美の歌をうたって主の庭に入れ。感謝をささげ、御名をたたえよ。(詩編 100 編 4 節)

患者さんからのエールを思い浮かべて

6 期生 遠藤 邦子

　　ずーっと祈ってきたリラ・プレカリアの学びの道が備えられた喜びもつかの間、自分が考えたよりずっと多くの課題にアタフタ。往復の山形新幹線の中が一番集中できる勉強場所でした。たくさん感動の中からひとつだけ記します。

　　ある施設でインターンをした時のこと。私がハーブと歌のご奉仕を終えベッドサイドにひざまずき、患者の M さんに挨拶をして頭を下げた時、M さんは私の頭をなでてくださったのです。立ち上がるとうすると両手で頭をなでてくださるのです。みんなが待っているのです。立ち上がるとうすると、今度は両手を私の方に差し出してくるのです。私は M さんの手を握り、しばし心の中で祈りました。私の目から涙があふれてきました。

　　M さんは私のことをご家族の娘さんか誰かと思われたのだろうか。もしかしたら、帰らないで、もっと側にいてほしい

と思ったのだろうか。ありがとうと言いたかったのだろうか……。私は帰りの電車の中でいろいろ考えました。でも私はあの M さんから、私のボランティアに対する力強いエールを受け取りました。それからはハーブ、歌の練習の時に M さんを思い浮かべて練習するようになりました。2 か月後、M さんは神様のもとに召されました。インターンの時のベッド上の多くの先生(患者の皆様)に感謝します。

深い詩編の学びと恵みの分かち合い

6 期生 辻 二巳

　　本講座に参加して私は、いままでの他のどこよりも集中的に詩編の学びをすることができました。心が感謝の思いで満たされています。

　　詩編 23 編・104 編・121 編などのなじみ深い恵みの詩編ばかりではなく、88 編にあるように人間のありのままの状況を時空を超えて照らし出し、授業で習った「順境・逆境・新境地」を認識することができました。それは同時に、弱くて情けない私たちへ向けられた、常に変わらない神様の慈しみのまなざしがあることの確認作業でもありました。

　　毎回のキャンドル会で皆様と恵みを分かち合い、至福の時を頂きました。私にも数え切れないほどに小さな日常の奇跡が与えられたなあ、と改めて驚いています。気づかないけれど、見落としてしまうけれど、主は共にいてくださるのだという静かな信仰のロウソクの火を灯していただきました。

　　膝関節を痛めてもっぱら自転車に頼っていますが、受講会場までの道は、毎日が繰り返しリラの 12 曲を歌う、私なりの巡礼の道としていただいたと喜び感謝しております。この神様を賛美するために私たちは生まれてきたのだと思う毎日です。お導きの主を賛美しつつ。



リラ・プレカリア 12周年 記念イベントのお知らせ

リラ・プレカリアの修了生がイベント実行委員会を立ち上げ、5月18・19日の二日間、「音楽から沈黙へ」と題するイベントを行います。この催しは、リラ・プレカリア創立12周年を記念して、オーストラリアからピーター・ロバーツ氏(ハーピスト・認定音楽死生学士)をお招きして実施されるものです。

ロバーツ氏は音楽死生学の分野でキャロル・サック宣教師(リラ・プレカリア創始者)の先輩にあたり、二人とも米国の同じ学院で、この専門的でユニークな学びを修めました。その後ロバーツ氏は、オーストラリアでこの分野における先駆的な働きをしてこられ、テレビでドキュメンタリー番組が作られるなど、高く評価されている方です。『The Harp and The Ferryman (「ハーブと船人」の意味)』という著書(共著)もあり、CDも複数枚リリースされています。

ご興味のある方は、ぜひご参加ください。各回先着100名の方にご入場いただけます。



【イベント概要】

主催：リラ・プレカリア イベント実行委員会

協力：日本福音ルーテル社団(JELA)

日時：5月18日(午前・午後)・19日(午前)

場所：JELA ミッションセンターホール



(東京都渋谷区恵比寿1-20-26) 会費：2000円(5月18・19日の二日間分一律)

申込：以下の口座への振込をもって参加受付とします。

ゆうちょ銀行 普通 記号 10950 番号 06930071 名義：ユゲマリ

問い合わせ先：弓削(ゆげ) 090-4393-2667

村田(むらた) 090-6543-5618

.....

♥読者からの便り

払込取扱票の通信欄に書いてあるメッセージや、事務所に届いたお便りの最近のものを以下にご紹介します。

♥ 早い雪のうえ連日寒さが続いています。

♥ 応援しています。閃きのひろみんさん!!

♥ クリスマス献金

♥ 熊本地震被災者支援のために。

♥ 貧富の差が拡大しているように思います。貧者の一灯ですが、貴社団を応援させていただきます。

♥ クリスマスカードをありがとうございました。貴社団の上に主の祝福がありますように。

♥ いつもお気遣い下さり有難うございます。足腰が少々不自由で、どこにも行かれませぬ。少額でおはすかし(*編集者注：以降の文字が払込用紙に印刷されていませんでした)。

♥ JELA NEWSの役割を祝して。熊本地震被災者支援のお働きに感謝致します。

♥ 御かげ様で主の御恵みを頂き米寿を迎えております。

♥ 心ばかりですが用いてください。共にいてくださる神様感謝致します。

♥ お働きの上に主の祝福がありますようお祈り申し上げます。

♥ お働きの上に神様の御祝福をお祈りいたします。

♥ 聖句を頂きまして有り難うございます。平和でありますようにお祈り致します。

♥ サマーキャンプに参加させて頂きま

した事を感謝して。

♥ ブラジル伝道のために。

♥ お働きの上に神さまの祝福を祈ります。

♥ M あらためひろみん→笑っちゃいましたがとてもいいです。この冊子そのものが親しみを増し、あたたかいものと感じられました。ガンバレひろみん!!川柳が楽しみです。そのうちに投句出きるでしょうか? 勉強します。感謝!!

♥ サンパウロ教会の音楽活動のために。

♥ お世話になります。娘がカンボジアキャンプに参加させて頂く事になり、どうかよろしくお願いします。

♥ アメリカのワークキャンプの貴重な体験は、娘を大きく成長させました。本当にありがとうございました。

♥ サンパウロ教会の音楽活動のために。

♥ クリスマスおめでとうございます。

♥ 少しでも平和になりますよう。

♥ ワークキャンプでは娘が大変恵まれた経験をさせていただきありがとうございます。神様のお役にたてるような成長を祈ります。

♥ お働きに感謝します。

♥ 教会附属の幼稚園の子どもたちとご家族の皆様と一緒にクリスマスの礼拝でお届けしたクリスマス献金です。

♥ 5月のコンサートは素晴らしく、来てくださった方も好評でした。

♥ クリスマス礼拝献金をおささげいたします。

♥ 園児クリスマス献金

♥ メリークリスマス。良いお年をお迎え下さい。

♥ ささやかですが今年も献金できたことを感謝します。主の平安をお祈り申し上げます。

♥ どこそこに寄付をしますので、この寄付金で御免なさい!!

♥ 新しい一年も皆様の上に主の祝福をお祈りします。

♥ 寒波と大雪お見舞い申し上げます。札幌も寒いですが慣れていきますので平気です。

♥ お働きの上に神様の御守りをお祈り申し上げます。



「第15回世界の子ども支援チャリティコンサート」がもうすぐ始まります。

5月から「世界の子ども支援チャリティコンサート」が始まります。15回目の今年は、昨年を上回る全国17会場でヴァイオリンとギターとのデュオをお届けします。演奏者は、三年連続の出演となる真野謡子さん(ヴァイオリン)、そして初登場の松田弦さん(ギター)です。ご家族やご友人をお誘い合わせのうえ、お近くの会場にお越しいただき、二種類の弦楽器が織りなす美しい調べをお楽しみください。

<巡演日程・開演時刻・会場>

♪ 5月12日(土) 午後2時 日本福音ルーテル岡崎教会

♪ 5月13日(日) 午後2時 同 沼津教会

♪ 5月19日(土) 午後1時30分 同 挙母教会

♪ 5月20日(日) 午後1時30分 同 保谷教会

♪ 5月26日(土) 午後2時 同 甲府教会

♪ 5月27日(日) 午後2時 同 清水教会

♪ 6月16日(土) 午後2時 同 刈谷教会

♪ 6月17日(日) 午後1時 同 都南教会

♪ 6月24日(日) 午後1時 同 名古屋めぐみ教会

♪ 6月30日(土) 午後2時 同 松本教会

♪ 7月1日(日) 午後1時30分 同 高蔵寺教会

♪ 7月6日(金) 午後7時 同 栄光教会 藤枝礼拝堂

♪ 7月7日(土) 午後3時 同 むさしの教会

♪ 7月8日(日) 午後2時 同 宇部教会

♪ 7月15日(日) 午後2時 同 神戸東教会

♪ 7月21日(土) 午後2時 同 熊本教会

♪ 7月22日(日) 午後2時 同 西条教会

※開場時刻は、いずれも開演の30分前です。

※経路等については、各会場に直接お問い合わせください。

<演奏予定曲目>

※変更となる場合があります。

・ルーマニア民俗舞曲(B.バルトーク)

・アヴェ・マリア(F.シューベルト)

・ソナタ・コンチェルタータ イ長調 M.S.2(N.パガニーニ) ほか

コンサートの途中に自由献金を募る時間があります(※熊本教会のみ ¥1,000の協力券制)。頂いた献金は、熊本地震による被災学生の学費支援のために用います。

奏者のおふたりから以下のメッセージが届いています。

<真野謡子さん> 昨年に引き続き、「世界の子ども支援チャリティコンサート」にて演奏出来ますこと、大変嬉しく思います。今回は、ギタリストの松田さんと共に、弦楽器の響きをお届けします。ギターとヴァイオリンのデュオは、私にとって新境地ですが、皆様と素敵な時間を共有できたら幸いです♪ 是非いらっしゃって下さい!

<松田弦さん> ヴァイオリンとギターのデュオは、チャリティコンサートでは初めての登場ですが、実は多くの名曲があります。この組み合わせならではの響きやプログラムを楽しんでいただけたらと思います。真野さんと一緒に全国様々な場所で演奏させていただけること、嬉しく、そして楽しみに思います。

難民シェルター ジェラハウス建て替え ご支援のお願い

このたび、2棟あるジェラハウスの古いほうを建て替えることになりました。築45年の木造住宅で老朽化が進んでいます。建て替え後は、より居住性が高く部屋数の多い、耐震構造を備えた建物に生まれ変わります。完成は今秋の予定です。

JELAは難民支援事業を1984年に開始しました。支援内容を模索するなかで、難民申請者の方々が無償で安心して利用できる住居が必要であるとの認識に至り、都内の中古アパートを購入し、91年から難民シェルター「ジェラハウス」として運営を開始しました。以来四半世紀にわたり、常に満室状態で難民申請者の方々に貸し出しを行ってまいりました。2011年には2棟目を購入し、両者をフル稼働させながら現在に至っています。

難民シェルターの提供は、難民の方が日本の大学などで学ぶための奨学金の提供とともに、JELA難民支援事業の大きな柱で、毎年の利用者は、約40～50名(延べ人数。出身国は、アフリカやアジアの十数か国)です。利用者は、難民支援NGO、国連難民高等弁務官駐日事務所(UNHCR)、公益財団法人アジア福祉教育財団 難民事業本部(RHQ)などからご紹介いただいた方々です。

今春から始まる建て替え工事の進展をおぼえてお祈りいただけますと幸いです。

また、この建て替え費用のためにご寄付をいただけますと、誠にありがたく存じます。

【寄付の方法】

○払込取扱票：当ニュースレターなどに添付されているJELA所定の払込取扱票をお持ちの方は、ご寄付の目的を記す欄に「ジェラハウス改築」とお書き込みいただき、払込・振替をお願いいたします。

それ以外の用紙をご利用の場合は、通信欄に「ジェラハウス改築」とお書き添えください。払込・振替先は以下です。

番号：00140-0-669206

加入者名：日本福音ルーテル社団

○クレジットカード：Visa、MasterCard、JCB、American Express、Diners Clubのいずれかのクレジットカードをお持ちの方は、JELAウェブサイト(www.jela.or.jp)からご寄付いただけます。お支払いの際は、「寄付の種類」を選ぶ項目で「ジェラハウス改築支援」を選択してください。

○銀行振込・・・振込依頼人の名義を「カイチク+ご氏名」とし、以下の口座にお振込ください。

横浜銀行 恵比寿支店(店番907)

普通口座 番号6002037

名義：一般社団法人日本福音ルーテル社団

ジェラハウスに住む家族から 感謝の手紙

1月初旬に、ジェラハウスに住む難民のご家族(お母さんと子ども二人)から、JELAの支援に対する感謝のお便りが届きました。お母さんは英語で、子どもたちは靴下の絵(クリスマスシーズンのイメージでしょうか)の中に日本語でメッセージを書いてくださっています。

このご家族は、昨夏にJELA職員の引率で東京・あきる野市の「サマーランド」へお連れしたり、JELAが12月に催した支援者向け報告会&パーティーにご招待したりするなど、シェルター支援を超えたつながりを持ってきました。

お母さんのメッセージは、以下のような内容です。

「年末年始のお休みを満喫されたことかと思えます。広く温かいお心から、私たち家族をジェラハウスに住まわせてくださり、ありがとうございます。

去年の夏に連れて行ってもらったサマーランドは本当によかったです。子どもたちはとても楽しい思いをし、今でもそのことをよく話します。12月にJELAのホールであったクリスマスパーティもすばらしかった。

皆さんは確かに神様が天から送ってくださった方々です。神様が皆さんのような人々を用いて、私たちのような貧しい者の心にふれるようにして下さることをありがたく思っています。

神様が皆様のお働きを祝福してくださいように。JELAの皆様一人一人を愛しています。ありがとうございます。」

政治経済的視点を踏まえた難民保護 第8回 難民認定審査が甘いと どうなる?

神奈川大学法学研究所 客員研究員
山本 哲史



この連載では、人々が難民保護のための法を守るように仕向けるための工夫について考えています。前回のコラム(第7回)では、難民として認定されていない段階の人についても国家は国際法上の一定の義務を負うため、その面倒さから逃れようと、申請者を減らそうとしている(遠ざけようとしている)国のあることを紹介しました。今回はその効果について考えてみたいと思います。

*著者は最近まで数年間、モンゴル国立大学法学部内・名古屋大学日本教育センターの特任講師としモンゴルに滞在されました。

■約束や手続を守るということ

日本人は一般的に「ちゃんとしている」と言われます。約束をすればたいてい守りますし、予定を変更することは少なく、待ち合わせにも遅れずやってきます。それらができない場合にも、そのことを申し訳なく感じ、謝罪したり反省したりをする人が多い。周囲に配慮し、「空気を読む」などという言葉も作り出し、共有している。悪く言えば、まるでいつも誰かに監視され、評価を気にしているのではないかと感じるような場面も少なくありません。

モンゴル人の場合、約束の時間に遅れてきたり、あるいは約束自体を直前になって変更したいと言ってみたりすることがわりとよくあり、日本人の一般的な感覚で接すると、「すこしいい加減なのではないか」と疑う向きもあるかもしれません。以前、横綱の朝青龍が怪我のためモンゴルに一時帰国していた際、それが仮病であると言わざるを得ないような元気ハツラツなサッカーをしていた、ということがありましたね。これを「いい加

減」という括りで捉えるべきか否かは定かではありませんが、私の印象としては、モンゴル人の場合、約束や周囲を気にしないのではなく、より本質的な面から物事を考える傾向が強いように感じています。つまり、形式にこだわり周囲を気にし続けるのが日本人であるのに対し、自分や周囲にとって本当に大切なものを柔軟に最優先しようとするのがモンゴル人、ということも言えると思うのです。例えば、約束の時間に遅れたけど、それはその人をもてなすための料理を準備したためだった、とか。朝青龍の場合であれば、サッカーをして遊びたいという友人の方を重視した、とか。

■日本の難民認定審査は厳格?

難民認定審査も他の行政と同様に、定められた手続にしたがって行われるべきものです。結論についても、誰かのフィーリングや直感で左右されるようなことがあってはいけません。「あなたは難民ではなくてセクハラを受けただけでしょ」「あなたは生活に困ってそうだから難民でいいよ」というようないい加減な認定をしてはいけないというのは、そういう意味です。

実質面でこのことを考え直してみると、そもそも認定審査やその手続が誰のため、何のためにあるのか、ということになります。本当に大切なことは何か。このことを差し置いて、ただ手続に従うというのでは意味がない。誰の方を向いて行動しているのかということこそ真剣に考えるべきです。厳格であるか否かが本質的な問題なのではなく、その審査が誰の方を向いていて、それが最低限のルールに従っているか否か、ひいては誰の利益や救援に寄与しているのか、といったことこそ注目されるべきなのです。

このような観点で日本の難民認定審査を考えてみると、前回少しお話ししたように、難民の可能性がほとんどない人にも無制限の申請を認めている反面、審査のなかで難民審査参与員の一部の者から不適切な質問がなされたりと、誰のための審査なのかということがないがしろにされている現状が見えてきます。もちろんすべてがそうだとするつもりはあ

りませんが、少なくとも真面目に助けを求め人が最優先されているようには思えません。「我々は手続には従っている」という言い訳をするために制度が運用されているようにも思えるのです。

■審査の厳しい国に申請者は来るのか

昨年1年間の難民認定数は28、申請者数が1万を少し超え、前の年と比べて3千人以上も増加ということです。認定率にすると1%を下回ることになります。不認定に不服を申し立てた者の数は5千人以上に昇り、しかしその再審査によって難民認定された者はわずかに2名ということです。この場合、認定率が低いということばかりが問題とされる傾向がありますが、私はこれには反対です。率そのものだけでは審査の適正を問うことはできません。法に従った審査が行われたか、その際に誰の方を向いて制度が運用されたか。さらには、そのように低い認定率にとどまる者、つまり5千人近くもなぜ再審査するのか。人権にはもちろん配慮しつつ、合理的な何らかのスクリーニングをかけるべきではないのか。その審査に要する経費、時間、世間に対する印象、ひいては難民全体に対する世間の印象、それこそ問われるべきだと考えているからです。

審査が甘いとこうした申請者の大量流入を防げなくなる、という主張を行う者もあります。したがって入管としては易々と認定などしない、という印象を広めることこそ重要である、という考え方もあります。難民認定審査の基準を定めて運用の一律化を追求しているのが欧州諸国ですが、そのいずれかの国で難民認定率は増加するような印象はあるけれども、そこに決定的な因果関係はない、とする結論を計量的な統計分析から導き出した経済学者もいます。つまり厳格な審査を実施する効果さえ不明なため、やはりそれは「我々は手続に従っている」ということを主張したい審査担当者たち(仕事を委任されている人々)の、世間(仕事を委任している人々、つまり日本国民)に対する主張のためにあるのではと疑わざるを得ないわけです。



新ジェラハウスの完成イメージ図



JELA職員募集

JELAはこのたび、財務・経理業務を中心に従事していただける職員を募集します。詳細は、JELA ホームページもしくは、記載の QR コードから募集要項へアクセスしてください。



- 募集職種：財務・経理
- 募集人員：1名
- 雇用形態：正職員（入社後3か月間は試用期間）
- 勤務地：JELA ミッションセンター（東京都渋谷区恵比寿一丁目20番26号）
- 待遇：
 - ①給与・賞与・各種手当＝当社団規定による。
 - ②勤務時間＝9：00～17：00
* 残業は月20時間以内。
 - ③休日・休暇＝完全週休二日制（土・日）。各種休暇は当社団規定による。
 - ④福利厚生＝各種社会保険あり。
- 提出期限：2018年5月15日（当日の消印有効）応募は郵送・宅配のみ受け付けます。

川柳ひろばだより

第11回川柳ひろば入選句発表!

次の三句が選ばれました（柏木哲夫・選）。冬季オリンピックにちなんで今回の賞は、金・銀・銅のメダルで表します。結果はなんと、ひとりがメダル独占となりました。その名は、高木美帆ならぬ「とんちゃん」。川柳ひろば始めて以来の快挙です。おめでとうございます!

<金メダル>

間違えて野望の党と書きちゃった

<銀メダル>

問題もノコッタノコッタ大相撲

<銅メダル>

獅子舞がテンテコ舞いの人気ぶり

以下のような佳作もありました（川柳ひろば管理人・選。柳名略）。

- ・この歳でサンタクロース待っている
- ・物よりも平和お願いサンタさん

- ・クリスマス エルサレム危機でリスクます
- ・「神は愛」単純を複雑にする長説教
- ・やっと出た便秘じゃなくて世界新
- ・「疲れる」と言って周囲を疲れさせ
- ・ペットボトルにも隠しカメラがいる時代
- ・豆まき後鬼を囲んで恵方巻
- ・欠伸する猫は時々哲学者
- ・親探し小池で生まれたアヒルの子
- ・退職年やけに目に付く賞味期限
- ・ガラクタを父は自慢母我慢

最後にお知らせです。現・川柳ひろば管理人は今年10月末日で管理人職を辞することになりました。長年のお付き合い、ありがとうございました。今後も、一定数の作品と投句者がそろった段階で随時優秀作を発表してまいりますので、本頁右下のJELA宛に積極的に投句くださいますよう、お願い申し上げます。（現・川柳ひろば管理人・森川博己）

支援者一覧

支援者一覧(2017年10月1日～2018年1月31日)

青木孝士/穂田宗隆/尼嶋治/荒井和子/安藤淑子/石原京子/伊東園子/池田賢治/池田哲也/井上秀樹/岩越優子/グアイジュ/梅田久子/浦和ルーテル学院小中高等学校/塔淑代/江崎恭子/大石敏和/太田立男/大塚眞佐子/大嶺裕司/可代・十六夜/奥山信子/勝部久子/加藤俊輔/カトリック徳田教会/金子佐人/河野悦子/キャロル・カク/九州学院みどり幼稚園/京谷信代/清宮正行/倉知延章/ローウェル・ケリベック/グレイ恵子/小坂敦子/古庄理世/小林佳子/小松由美/権藤久喜/齊藤正恵/酒井恵美子/佐野友美/志村治夫/新角房子/杉浦りえ/鈴木やす/全国難民弁護団連絡会議事務局/高橋佳子/高橋ふく子/高橋悠美子/高松礼子/竹渕三和子/田坂仁/立山久美子/田中栄子/田中美紗子/谷口孝一/玉名ルーテル幼稚園/津野順子/轟木信治/中川浩之/長田ひろみ/中村桂子/中山純郎/鳴海亮/西垣親子/西立野園子/野上きよみ/野田マサ子/芳賀美江/針田ゆかり/春木イツ子/馬場孝夫/東貴也/深澤理香/福地明子/藤井礼子/湊田康穂/櫛原コーポレーション/保坂和子/星野幸子/堀江亀子/松浦雪子/松尾均/南節子/宗方美代子/村上裕子/村木直樹/室井智子/森保宏/森若奈/森田雅子/森部信・榮子/ルーテル学院大学同窓会/ルーテル学院幼稚園/前川隆一/安みぎわ/安田やまと/山県順子/山口初子/山内恵美/山本雅子/山本了/吉田員子/吉田明浩/若原奇美子/JELC大分教会/JELC大岡山教会/JELC市ヶ谷教会/JELC浦田教会女性の会/JELC小石川教会/JELC高蔵寺教会付属こひつじ園/JELC下関教会/JELC下関教会ホーム会/JELC玉名教会/JELC博多教会/JELC保谷教会

以上、順不同・敬称略。ご支援ありがとうございます。匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。



- ◆派遣期間：2018年7月25日（水）～8月7日（火）
- ◆内容：ペンシルベニア州で一週間のワークキャンプ



詳しくは
ホームページで

編集余話

「林檎が木から落ちるのを見てニュートンが万有引力を発見した」と小さい頃に聞いた時、ピンとこなかった。社会人になってすぐ、ある児童文学書で同じ話題に再び出くわした。そして、主人公の少年に叔父さんがこの大発見のプロセスを説くくだりを読み、心から感動した。40年以上も前のことである。この本の漫画版がベストセラーだという。『君たちはどう生きるか』だ。

PR誌『図書』の岩波文庫創刊90年記念号「私の三冊」によると、アンケートに答えた二百数十名の著名人のうち4名が、影響を受けた本として『君たちは～』を挙げている。4名以上の票が集まった本は限られているので、人気のほどがわかる。アンケート回答者ではないが、ニュース解説でおなじみの池上彰さんや戦後を代表する政治学者・丸山眞男もこの本にほれこんでいる。「林檎の落下と万有引力」のワクワクする説明は、私もすべての人に読んでほしいと思っている。（ひろみん）

JELAの活動にご支援を!
各種献金のご送金は下記をご利用ください。



ホームページからクレジットカードで寄付ができます!

JELA
Japan Evangelical Lutheran Association

一般社団法人日本福音ルーテル社団
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26
Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523
Email: jela@jela.or.jp
HP: http://www.jela.or.jp
郵便振替口座番号: 00140-0-669206
加入者名: 一般社団法人日本福音ルーテル社団